

# 「ベルマーク貯金箱」親子で使って効率アップ

## 佐賀市立高木瀬小、集計方法にも独自の工夫



①貯金箱が出来てから「子どもが自分から進んでマークを持っていくようになった」という反応もあったそう  
②収集用封筒は児童のボランティア委員が確認のスタンプを押し、返却する  
③武藤さんは「ダンボールと牛乳パックのシンテレラフィット」と話す  
④武藤千亜紀さんとお子さんの亮太さん(6年) ⑤財団に届いたマーク

佐賀市立高木瀬小学校(原口弘之校長、806人)はベルマーク運動が盛んで、累計点数は700万点に迫り、県内では断トツのトップです。とはいえ活動に問題がなかった訳ではありません。

「4年前に初めて委員になったとき、作業量の多さが気になりました」と話すのは、今年度PTA環境委員長を務める武藤千亜紀さん。当時は、全委員が月1回学校に集合、マークを自宅に持ち帰ってテープで貼り、それを再度回収して集計……という流れでした。

2年後、再び環境委員になり、「ベルマーク運動説明会」に参加。そこで初めて、活動の意義を認識しました。

そして2020年度、武藤さんは委員長に立候補。「ベルマーク貯金箱」と「数えるだけ集計」、「エクセル集計表」

の導入を決めました。「ベルマーク貯金箱」は縦に置くとマークを集める貯金箱に、横に置くと仕分け作業時の整理箱になる優れもの。軽くて持ち運びも簡単です。「数えるだけ集計」は、マークの切り直しやテープでの貼り直しをせず、点数明細を記録したらビニール袋にまとめる手法。「エクセル集計表」は、枚数を入力すると自動的に各社の合計点数が計算されます。

活動は月1回、今年度は1回につき3～4学年のみの集まりとしました。工夫を取り入れると、全委員でなくても約3時間で発送まで終わられました。

改革はさらに続きます。以前から「親子のふれあい」に関心があった武藤さんは、新たな活動にも挑戦しました。マークを貯金箱に仕分ける「参加活動」には、ボラン

ティア委員の6年生や全学年から興味のある児童が参加します。9月からは、昼休みの15分間に保護者と児童と一緒に仕分けをする「ふれあい活動」もスタート。また「エコ活動」として収集用封筒の自作を始めました。

高木瀬小がベルマークで次に買いたいものは手動の鉛筆削り。児童のボランティア委員会が「電気代がかからずエコだから」と選びました。武藤さんの思いが子どもたちにきちんと届いています。

武藤さんは、ベルマーク運動に参加する他校に伝えたいこととして、こう語ります。「マークは綺麗に切らなくても、テープで貼らなくても大丈夫。そして、親子での作業や、子どもが主体的に携わることで、点数の価値以上のものが得られる活動になりました」

# 子どもも大人もできるボランティア、継続

## 北海道・士別ベルマークの会による寄贈マーク活動

北海道士別市のボランティアグループ「士別ベルマークの会」は、市民や地元企業・団体からベルマークを集め、保育園やベルマーク財団に寄贈しています。コロナ禍の昨年も「豪雨被害を受けた学校のために」と活動を続けました。

会の代表は平賀尚子さん。「2018年に会を立ち上げ、市社会福祉協議会のボランティアセンターに登録しました」。活動はツイッターやフェイスブックで情報発信しています。回収箱を社協窓口と図書館に置き、毎年7月に開かれる社協主催の「ふれあい広場」にもブースを出しています。「昨年の広場はコロナで中止になり、残念です」と平賀さん。

それでも7月豪雨の被災校のために役立てようと、社協や地元紙を通じてベルマーク収集を呼びかけました。仕分け・集計要員も募集、50～70代の11人が協力してくれました。社協の会議室で互いに距離を取りながら作業をしたそうです。その結果1万7718.3点が財団に送られ、ベルマーク新聞12月号の寄贈者リストに会の名が載りました。

この会には、実は長い前史があります。平賀さんは中学の代替教員や高校の時間講師を務めた経験があり、市内の中学校で相談員をしていた2000年に、不登校などを経験した子どもと保護者の会「や



⑥士別ベルマークの会のみなさん。前列中央が代表の平賀尚子さん ⑦同会のツイッター画面。コロナ禍の昨年も「豪雨被害を受けた学校のために」と活動を続けた ⑧昨年の仕分け・集計作業の様子

まびこネットワーク」を立ち上げました。その活動の中で「子どもも大人もできるボランティアとして、ベルマークを集めるようになりました」。2010年には財団に参加登録。貯めたベルマーク預金は「人のために役立てよう」と、すべて財団の友愛援助に寄付しました。

市が不登校児の教室を作ったことに伴い、やまびこネットワークは解散しましたが、ボランティアとしてのベルマーク

活動を引き継ぐため、新たに作られたのが「士別ベルマークの会」です。社協地域福祉係主事の古川芽衣さんは「解散時にマーク収集も終わりにする選択肢もあったかもしれませんが、活動を続けていることは素晴らしい」と話します。

活動の輪は広がりを見せています。「災害に遭われた人のために」と長年集めたマークを届けてくれる人がいたり、地元企業や団体からマークが贈られたり。一



昨年は平賀さんが市立士別南小学校(鈴木康弘校長、児童315人)で、ベルマークについて話す機会がありました。3年生の総合的な学習で、支援につながる仕組みやマークの仕分け方を説明したので。

「ウィズコロナを意識して今年は活動しました。ベルマークは今も集まって来ているので、来年もまたやらなくちゃ」と平賀さんは意気込みを語りました。